



神戸YWCA夜回り準備会 むかむか

(活動報告書 vol. 7)

はじめに

臺 信一郎

毎年 1 年を振り返ってまとめているこの夜回り準備会の報告書も 7 冊目になりました。野宿している人を取りまく状況は変化していきますし、「どんな問題があったか」「どんな変化があったか」などを毎年報告書の形で直接参加できない人にも知ってもらおうと始まったのですが、今年はメンバーが夜回り準備会の活動外で経験したことも交えて、少し違った角度からも考えられる内容になったのではと思います。

今年度を振り返ってみて、この夜回りでの活動内、活動外ともに「いろんなことがあったなあ」というのが正直な感想です。2011 年 3 月 11 日の東日本大震災の被災地の様子は、当時海外にいた自分にとって、信じられないというか何が起きているか理解できないものでした。でも被害の凄まじさと同時にショックだったのは、神戸に戻ってから大学の友達に話を聞くと、「まあこっちは関係ないけどね」という反応をする人もいたことです。その後実際に被災地に行ったりもしたのですが、そこで仮設住宅に入った人が孤立する、という問題がありました。そしてそれは、野宿をしている人が生活保護を受けて居宅に移ったときに起こりうることでもあります。被災地で起きている問題はすごく身近なところにもあるのに、一過性のもののように関心が薄れていっているように感じます。YWCA の夜回り準備会の活動が、阪神・淡路大震災の救援活動のなかから始まった、というのは過去の報告書ですでに書かれていることですが、今回の震災は自分の活動の原点を見直す機会にもなりました。

この報告書は「活動内でのできごと」で夜回り準備会の活動で出会った人のこと、起こった出来事、それからアルコール依存症について報告します。

「活動を通して感じたこと」でハラスメントや原発労働者、夜回りの活動外で会う野宿している人のことについて、「メンバーのその他の活動」で被災地でのことやイギリスでの教育費削減反対デモについて、「参加者感想」が主な内容です。ハラスメントやアルコール依存症の問題は継続的なテーマですが、私たちがとても大事だと感じている問題で、これからもみんなで考えていきたいです。私たちにもまだ良くわからないこと、どう対応していいか当惑していることがあります。記事を読みながらみなさんにも一緒に考えてもらえたら、また感想や意見を寄せていただけると幸いです。



目次

0. はじめに	臺信一郎	1
1. 活動内での出来事		
1-1. 全体の概要	西野和	3
1-2. できごと	築山麻里子	5
1-3. アルコール依存症は病気だ	築山麻里子	9
2. 活動を通じて感じたこと		
2-1. 運動の中のハラスメント	鍋谷美子	11
2-2. 原発事故の背景に	野々村耀	14
2-3. 活動外で会う人たち	西野和	17
3. メンバーのそのほかの活動		
3-1. 神戸と東北～野宿者と被災者	臺信一郎	19
3-2. 被災者になれない？人達	野々村耀	21
3-3. イギリスで教育費削減反対学生デモに参加して	田宮遊子	23
4. 参加者感想		25
5. 付録：わいわい通信原稿	臺信一郎・井沼佑太・西野和	31
2010 年度会計報告・寄附寄贈報告		34

【表紙解説】「いぢわるベンチ」

最近、当たり前のように見かける仕切りつきベンチ。昔はこんな仕切りはありませんでした。人が横になることを阻む、鉄の棒。「人にやさしい・人がやさしいユニバーサル社会の実現をめざす」と謳っている神戸市にはいたるところにいぢわるなデザインがあふれています。（なべたに画）

1. 活動内での出来事

1-1、全体の概要

西野 和

ここでは2010年7月～2011年6月までの活動、夜回り・病院訪問を含む全体の概要をまとめます（神戸市のもののみ2011年8月分を使用）。

① 神戸市全体では

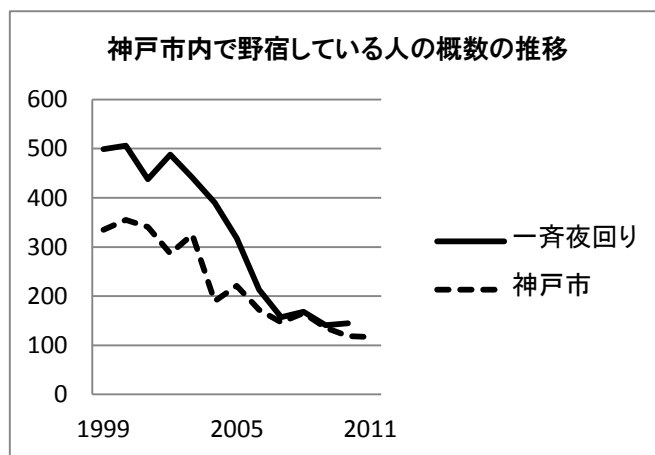
神戸市では、「神戸市ホームレスの自立の支援等に関する実施計画」に基づき、野宿者対策の根拠として実態把握をするために、毎年ホームレス一斉調査を行っています。2011年度も8月25日(木)20～22時に実施されました。その結果、総数は117名(男性114名、女性3名)となっています。

区	東灘	灘	中央	兵庫	北	長田	須磨	垂水	西
男性	4	5	78	6	0	9	6	5	1
女性			1				2		

1999年以前に行われた市の調査の結果は、野宿者支援をしている側の実感を下回っていたため独自の調査が必要だと考え、1999年から、年に1度7月始めに一定の日時を決めて、市内で夜回りしているいくつかのグループが一斉に野宿している人の数を調査しています。これを「一斉夜回り」と言います。神戸YWCAは灘・東灘区を担当しています(取りまとめ「神戸の冬を支える会」)。

近年の一斉夜回りと神戸市の調査の結果は右上のグラフのようになっています。

一斉夜回りを始めた頃は市の調査と大きな差がありました。最近ではあまり差はなく、いずれの調査でも数は減っています。2011年度の一斉夜回りの結果はまだ出ていませんが、2011年度も2010年度とあまり数は変わらないと思われます。



② 夜回り活動記録

表:夜回り参加人数と出会った人数(2010.7～2011.6)

月日	参加者	訪問先	出会った人数
7/10	8	20	10
7/31	7	19	7
8/14	4	15	6
8/28	7	19	7
9/11	3	12	9
9/25	6	16	8
10/9	7	21	10
10/23	5	18	12
11/13	5	18	5
11/27	3	14	9
12/11	7	17	7
12/25	3	15	7
1/8	5	17	8
1/22	7	18	8
2/12	4	13	8
2/26	6	15	7
3/12	7	18	7
3/26	6	17	5
4/9	5	15	5
4/23	5	16	8
5/14	3	13	7
5/28	5	13	7
6/11	4	15	7

私達の夜回りの結果は表のようになっています。出会った人数は、少し増減はしますが大きくは変わりません。人数としては変わりませんが、居宅に移った人、新しく出会う人があり会う人は変わっています。また、活動のなかで新しく会う人、新しい人を見たという情報も多くあります。野宿している人の数は減ってきていますが、一方で新しく野宿になる人もいるということだと思われます。

③ 病院訪問のこと

病院訪問は2000年頃から始めており、現在は週一回木曜日の午後に訪問を続けていますが、最近はありません。

そもそも野宿の人が入院した時には、医療費が支払われ生活保護を受けられている状態です。しかし、退院した途端に打ち切れ、野宿の状態に戻ってしまうことがあります。お見舞いと、退院した人が、また野宿しなくて済むように、その後も生活保護を受け続けられるようにと始めたのが病院訪問です。また、訪問をつづけているうちに、私たちがこれまで会っていた人以外にも「退院したあと帰る家がない」といった人がいることが分かり、そういった人たちの訪問もしています。

しかし最近、国の方針で入院できる病床数が減っていること等があり、あまり会う人がいません。また、更生センターもその病院をあまり紹介しなくなったのかもしれない。



④ 居宅に移った人、新しく出会った人

私達が日ごろ訪問していて、この間に居宅に移った人は2名です。1名は、直接アパートの大家さんに声をかけられ、居宅へ移ったあと、生活保護の申請をしました。もう1名は救急車で運ばれ入院、その後居宅で保護を受けることになりました。また、病院訪問でも1名居宅へ移った人がいます。

一方で新しく会うようになったのは3人です。

1人は2010年7月の一斉夜回りで新しく出会った人です。以前野宿している人がいた所なのですが、フェンスで囲まれ入れなくなっていました。そして最近そのフェンスに入口ができ、入れるようになったため一斉夜回りの機会に回ったところ、そこで出会いました。しばらく前から暮らしているそうで、その後もずっと夜回りで回っています。

もう1人は、もともと夜回りで訪問していた人の古くからの友人で、そのすぐ隣で生活を始めたということで夜回りに行ったときに紹介されました。違う場所にいたが、そこに人の出入りが多くなったので居づらくなりここに移動してきたということです。

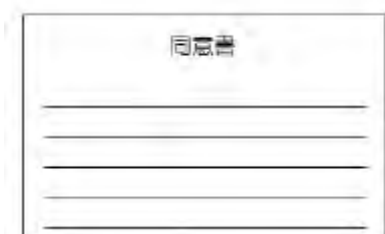
最後の1人は、夜回りの最中に会った人です。いつもそこで寝ているわけではなく、仕事中にたまたま休憩しているところに出会い、それからは毎回その場所で会うようになりました。一定の場所をあまり持たず、仕事の都合や別の団体がしている夜回りの日などに合わせて移動しながら暮らしているようです。

1-2、できごと

築山 麻里子

◆野田さん

病院訪問で度々会っていた野田さんが、手術を受けることになった。その時入院していた病院では、手術を受けるには同意書が必要だと言われた。私たちに書いてほしいと頼まれたのだが、親族がいることがわかっていたので、親族に連絡をとってもらよう頼んだ。医療事故が起こった場合、親族に対して責任がとれないので私たちがサインするということができなかった。親族と連絡はとれたものの同意書が得られず、手術が受けられない状態となった。その後、ケースワーカー(CW)がかけあってくれ、本人の同意書のみで手術が受けられる病院へ短期入院し、無事手術を受けることができた。1人暮らしの人が増えている社会で、親族の同意を得るということが現実的でなくなっていると感じる。



◆丹波さん

私たちが夜回りで会っていた丹波さんが、11月末に体調不良で救急搬送され入院した。本人から連絡を受け、翌日病院を訪問した。丹波さんは居宅保護を受けたいと希望していた。搬送された病院は、急性期病院(緊急・重症な状態にある患者に対して高度で専門的な医療を提供する病院)で在院日数がとにかく短く、生活保護申請と部屋探しの手続きを急いでしたることになった。丹波さんが入院した翌々日、病院のメディカルソーシャルワーカー(MSW: 患者が

抱える病気以外の問題について、社会福祉の側面から援助する)から東灘福祉事務所に保護申請を出したという連絡を受けた。私たちは、東灘福祉事務所に電話し、保護決定前に退院になった場合でも手続きが中断されないように、要請した。退院しても、家が決まるまで更生センターで寝泊まり(待機)できるようになど、とにかく保護が切れないように対応してもらうことも考えての電話だ。翌日訪問すると、生活保護面接員のCWと病院MSWと丹波さんの3人で話し合う場があったと聞いた。それを受けて私たちは丹波さんと話し、部屋やトイレなどは共同でないことや、年内には入居したいという丹波さんの思いを聞いた。CWに敷金を出してほしいと話すことや、敷金が出てからでないと借りられない場合と、出ることが確認できれば事前に入居できる場合とがあることを伝えた。

翌日、丹波さんのもとに東灘の担当CWが初訪問した。敷金は出せる方向だが早くても12月24日になると言われた。入院7日目、丹波さんとアパートの下見をし、本人も納得して部屋を決めた。福祉事務所に電話し、経過を伝え、布団や家具什器費、保護決定までの貸付金などの話をした。翌日、丹波さんから電話があり、昨日契約書を作成したこと、退院が2日後の昼になったこと、退院後CWが12月の家賃と2万円の貸付金を持ってきてくれること、礼金・布団代・家具什器費は保護決定後になることを聞いた。また、東灘から灘へ保護変更をしなければいけないことも聞いた。そして入院から10日後、丹波さんは退院した。

入院すると必然的に医療保護を受けている状態になるので、この機会に支援ができると居宅保護を受けやすい。しかし、通常保護申請から決定には1カ月くらいかかるので、短い入院期間の中で、病院のMSW、東灘のCW、アパートの大家さんと連絡を取り合いながら保護申請と部屋探しをしたので、とにかく

急がないといけない。帰る家のある人なら、入院が短くてもいいだろうが、家が無い人には酷である。丹波さんは自分が野宿していた場所で保護決定を待ってもいいと言ったが、今の神戸市の対応ではそれは許されない。

◆越年でのセーファー・スペース

2009年度の報告書でも書いたが、YWCA 夜回り準備会のメンバーが、炊き出しの場で体を触られる、その後周囲の人に二次被害を受ける、ということがあった。この問題は、神戸の越年実行委員会でも取り上げられ、話し合いを続けてきた。その後、翌年の炊き出しでは何か嫌なことがあったら声をあげていい、つらくなったら逃げることもできる、というメッセージとともにセーファー・スペースという取り組みを持った。また、2010年の寄せ場交流会が神戸で行われた時には、この問題について実行委員会では何らかのアクションをしようと話し合いを重ね、全体会で呼びかけるという行動も起こしてきた。この問題提起は、2011年に行われた寄せ場交流会@京都でも、引き続き行われた。

そして、2010年度の越年越冬炊き出しでは、現実にセーファー・スペースのブースを使用する出来事が起こった。その出来事については継続して話し合いができておらず、取り組もうとする人が限られてしまうという現実があった。しかし、今回の出来事でもセーファー・スペースという取り組みが必要とされていることを強く感じ、そして実際に何かが起こらないようにセーファー・スペースという取り組みがあることを発信することが大事だと、改めて感じた。今後この問題にどう取り組んでいくか大きな課題となっている。



【コラム】セーファー・スペースとは？

日本語に直訳すると、「より安全な空間」。具体的な場所というよりは、絶対「安全」(safe)な場所はないが、できるだけ、「より安全」(safer)な、空間をそこにいる人みんなでつくっていかう、というような考え方を指す。日本には2008年北海道での反G8サミットのときに持ち込まれたようだ。そこでこの取り組みを経験した人たちが各地の運動現場に持ち帰って試行錯誤しながら行っている。ただそれまでも、名づけられてはいないが、関西の運動現場では、やはり性暴力や差別事件が起こっていたことを問題視し、取り組まれたいくつかの同じような試みがあったということを確認している。

【参考】

*「セーファー・スペース」のころみ
——問うこと・問われること・支援することに開かれた運動の場を求めて(2010年8月発行パンフ)

*フェミニスト+クイア ユニット(反G8@2008 北海道で行われた取り組みのサイト)

<http://femqueerunit.wordpress.com/>

『<より>安全な空間とは何かについての5項目

FLARE in the Void (For Liberation, Autonomy, Resistance, Exodus) 編集の This is a Safer Spaces policy 2007年版より。

1. 他者の身体的、精神的、感情的領域／境界を尊重する。
2. 他者の領域／境界に触れる、あるいは横切る前に必ずはっきりとした口頭の同意を得る。
3. 全ての人の意見、信仰(精神的、身体的その他、存在の異なるありよう、そして異なる見解を尊重する。
4. 自らの行動とそれが他者に及ぼす影響に責任を持つ。
5. 自らの安全に責任を取り必要なら支援を求める。』

(上記参考パンフ&ウェブより引用)

◆秋元さん

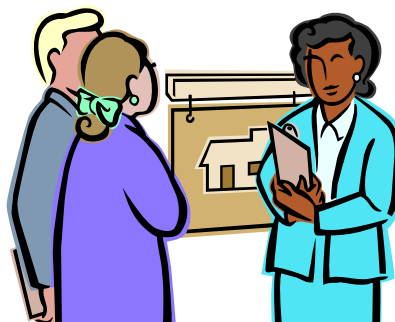
1月ごろに病院訪問で旧知の秋元さんに出会った。入院になったときには、すでに足が悪く寝たきり状態になっていた。独り言が多く、他の患者さんやその家族にとにかく言うので、大部屋からナースステーションの横の部屋に移されていたり、看護師長に「見舞いに来るなら、即刻引き取ってくれ」と私たちが怒鳴られたこともあった。そんな様子だったので、私たちは今後どうしていくか悩んでいた。3月初めごろ、いつものように病院を訪問すると、秋元さんが昨晚急激な腹痛で別の病院に緊急入院したと聞かされた。急いでその病院に向かうと、医師から「脱水症状で血流が滞っていて末梢まで届いていない。腸、肝、腎がやられている。透析をしたいけど、導尿により細菌が感染し敗血症を起こし、多臓器不全まで進行している。もう長くはないので、CWと話し延命治療はしないことになっている。」と説明された。私たちは明日も見舞うことにして、その日は帰ることにした。翌日、見舞いに行くと、ナースステーションで「昨晚亡くなられた」と聞かされた。身寄りには妹さんだけだが、入院されているとのことだったので、私たちを含め関わった数名で翌日、お別れをした。

秋元さんは、転院したけど手遅れで亡くなられた。病院という環境にいたにも関わらず、秋元さんの状態が手遅れになるほど悪化していたので、病院の治療や対応に不信感を抱かずにはいられなかった。また、葬儀会社の対応にも不信感を抱いた。葬儀について生活保護課は「保護を受けている場合、保護費の葬祭扶助、総額で（死亡診断書の費用なども含めて）212770円出る。読経や供花も、範囲内で使える。」と説明している。しかし、今回の葬儀会社はコストを安く済ませようとしたのか、私たちが電話をした葬儀に人が行かないと供花を出してくれなかった。こちらから強く言わないと対応してくれない。身寄

りがない人に対しても誠実な対応をしてほしい。

◆梅田さん

家族と関係が悪いので、アパートを借りてひとりで暮らしたいという相談を、梅田さんより受けた。部屋探しを手伝い、部屋の見つかった地域の福祉事務所で生活保護の相談をすることにした。しかし、大手の不動産屋になればなるほど保証会社が必須だったり、収入が無く生活保護を申請する前の状態だと難しかったり、大家さんに断られたり、すんなりとは借りることができなかった。近年、部屋探しはますます難しくなっていると感じる。



◆山上さん

山上さんは、市営住宅に住んでいたが、妄想により「隣室の人が天井裏を通って部屋に入って、物を盗む」と思い、壁をたたいて怒鳴ったところ、近隣の人とトラブルになって、市の住宅局の人が6人できて、出るように言われた。妄想を抱えながら暮らしているなど、このように近隣とトラブルになることは高齢化社会では増えるだろう。近所も困るだろうが、本人も出て行く先がないので困ってしまう。市は単に追い出すだけでなく、トラブルの原因を考え対応していくべきだと思う。



◆林田さん

私たちが夜回りで会っていた林田さんが、逮捕されるという出来事があった。5月初め、林田さんはコンビニでお酒を万引きし現行犯逮捕された。数日後弁護士から電話をもらい、私たちの知ることとなった。すぐに面会しようとしたが、夜間・土・日・祝日が駄目で、さらに急だとしても会えないこともあるそうなので、警察に前もって電話予約し、拘留より10日ほど経ってやっと面会できた。林田さんは、以前にも軽犯罪法違反（立ち小便）で1ヶ月くらい拘置されたことや、器物損壊で執行猶予つきの前判決を受けたことがあった。すでにアルコールでいろいろ問題を起こしているのに、出られたとしても、期アルコール依存症の治療などにつながらないと、また同じようなことになるのではないかと、林田さんと話した。

5月中頃に起訴が確定し、拘置所に移った。その後、R
公判の日程が決まり、神戸簡易裁判所にて行われることとなった。数日後、弁護士と打ち合わせし、アルコール依存症の問題を少しでも分かってもらえるように相談した。何度か林田さんに面会に行き話をしたが、生活保護やアルコールの治療などこの先のことについて、林田さんの気持ちが分からないところもあった。弁護士と再度打ち合わせをし、公判に臨んだ。私たちのメンバーの1人が情状証人となった。翌週の判決の結果、罰金20万の求刑となった。そして、林田さんは40日間すでに勾留されていたので、その未決日数分を1日5000円に換算し相当額を参入すると、判決日当日出所できることになった。林田さんは、1度更生センターに医療、生保、断酒などについて相談に行き、医者に診てもらい、しばらくそこで生活することになった。翌日、更生センターに行き林田さんと話し、CWには林田さんの話をよく聞いてほしいと頼んで帰った。あとでCWから電話

を受け、「医療を最初にし、その他は本人の希望を聞きながら進める。」とのことだった。裁判証言ではアルコール依存症についても話したが、判決の内容にはそのことには触れられておらず、依存症と犯罪がどのようにつながっているかは伝わらなかったように思う。懲罰を与えるだけでなく、治療につながるような判決ができるようにならないものだろうかと思う。

◆火事のこと

前年度の報告書にも書いたが、昨年8月にHAT神戸で、野宿者を狙った襲撃事件があった。同じ時期に私たちが夜回りしている範囲でも、テントの火事が2件あった。そして、2011年に入ってから、私たちが夜回りしている場所でまた火事が2件あった。1件は、神戸新聞によると、神戸市灘区のJR高架下から出火し、銅線や布団等約1平方メートルを焼いたと報道されていた。

もう1件は、新聞記事にこそならなかったが、テントは焼け荷物はバラバラに散乱しており、辺りの木の葉も焼かれた熱で茶色くなっていたほどだった。2か所とも私たちの知り合いが暮らしている場所で、その時はたまたま誰もいなかったが、人がいる時だったら大変なことになっていた。人が住んでいる所に火を付けることはすごく重大なことなのに、調べにも来ないし記事にもならない。そのことが野宿している人への偏見を如実に表していると思う。



◆御影さん

病院訪問で出会った御影さんは、退院後生活保護を受けアパートで暮らしていた。本人から車いすで1人暮らしをしていくのはもうしんどいという相談を受け、「一人暮らしは難しいから施設に入りたい」という本人の希望を担当CWに相談してみた。CWは、「車いすでも暮らしやすい低い土地に引っ越し、介護認定をしてヘルパーもきている。障害者地域生活支援センターや病院をいくつも紹介した。御影さんは去年何度も救急搬送されているので、しんどくなったら近い病院に行くようにも伝えてある。地域生活してもらわなアカン。」と言う。また、「私たちは事務屋だから」とも言われ、私たちとしてはこの言葉が気になった。御影さんの不満は解決できそうなこともあったが、御影さんの状況や思いがよくわからず、私たちにはどんな支援ができるかわからなかった。



◆更生センターのCWの話

更生のCWの話を聞く会を開いた。その話によると、更生センターの処遇が居宅に繋がることもやるようになってきた。居宅保護も、3階の施設に入れというだけでなく、その先居宅という選択肢も考えるようになった。更生は、従来より利用しやすくなったようだ。入所時に、センターに入れば、退所して居宅になるとき敷金支給ができ、就労するときにも、敷金や、家具什器費、就労支度金など出せること、あるいは、住まいを決めて福祉事務所で保護申請できることなどを説明している、ということだった。

※「できごと」文中の人物名はすべて仮名です。

1-3. アルコール依存症は病気だ

築山 麻里子

私たちは、活動の中で、アルコール依存症ではないかと思われるような人に時々出会います。その度に、本人もその周りの人たちも、アルコール依存症が病気だということを理解してないように感じることもありました。ここでは、私たちが出会った人ということで、野宿している人を例で取り上げていますが、アルコール依存症とは、生活が破綻した人や野宿している人のみを指しているものではありません。日常生活に問題もなく社会的に活躍しているように見えても、アルコール依存症を抱えている人はいます。アルコール依存症は、誰もがなりうる病気です。

Aさんは、アルコール依存症とは別の病気で入院した時がありました。Aさんは、入院中にお酒を飲むと退院させられるとわかっていたのですが、飲んでしまいました。そして、強制的に病院を出されました。またBさんは、飲みたいという強い願望に駆られ、お酒を万引きし、逮捕されてしまいました。夜回り中でも、酔って暴言を吐いたり、別人のようになりたりする人に会うこともありました。このような行動は、アルコール依存症という病気の結果として起こっています。病気ということは、本人の頑張りではどうしようもなく、治療を必要としています。しかし、Aさんの場合、明らかな異常行動が見られているにもかかわらず、病院ではアルコール依存症の治療は行われませんでした。それどころか、入院目的である病気の治療すら受けられないまま病院から追い出されました。Bさんの場合も、逮捕後の裁判では、お酒の万引きはアルコール依存症という病気が引き起こしているという内容は考慮されず、拘置所を出た後の対応についても治療につながるよ

うな配慮はありませんでした。このような周囲の反応が当たり前のようには存在すると思います。社会では、アルコール依存症は自分で何とかするものとして扱われ、病気だということ、治療しなければいけないものだという認識が少ないように感じます。



では、アルコール依存症とはどんな病気なのか。アルコール依存症は、アルコール（厳密に言えば、お酒の主成分であるエチルアルコール）のもつ依存性によって発病する病気で、薬物依存の一つです。アルコール依存症とは、飲酒量を自分でコントロールできなくなる症状をいいます。私たちは、体調の悪い時はお酒の量を減らしたり、祝い事ではお酒の量を増やしたりと、お酒との自由な付き合いを保つことができます。しかし、この中から、夕食時にお酒が無いと淋しいと感じたり、イライラした時には一杯飲まないと気が済まない状態にまで進む人がいます。そして、事情が許す限りお酒を手に入れようとします。これを、「精神依存」が形成された状態といます。これには、お酒の量だけではなく、体質などの個人差があります。さらに進むと、肝臓を悪くして入退院を繰り返したり、仕事の遅刻・早退・欠勤が目立ってきたり、家庭内で問題が生じてきたりといったアルコール関連障害が出てきます。そし

て、失敗が続くと、本人はお酒の飲み方を変えたいと思うようになります。しかし、飲み方を変えたくても、変えること自体が体の変調をもたらす「アルコール離脱症状*」が現れます。これを、「身体依存」が形成された状態といます。アルコール離脱症状を恐れて、症状を引き起こさないようにお酒を飲み続けてしまう人も少なくないそうです。身体依存がみられると、アルコール依存症と診断されます。また、アルコールは「耐性」を形成します。「耐性」とは、同じ量のアルコールを続けて摂取しているうちに、その効果が弱まり、これまでと同じような酔いを得るにはより多くのアルコールが必要になる状態です。つまり、アルコール依存症は、「精神依存」と「身体依存」、「耐性」から成り、その主症状は、この辺でやめておこうと思ってもブレーキが効かないという「飲酒量を自分でコントロール出来なくなる症状」をいいます。

アルコール依存症の治療は、医療的なサポートが受けられる環境で、断酒を行い、継続することです。しかし、アルコール依存症は、現状では82万人いると報告（平成15年）されていますが、そのうちアルコール依存症として治療されているのはわずか2万人前後です。治療へのつながりにくさは、社会の価値観が少なからず影響しているように思います。私たちの社会は、お酒のCMや広告が多く出回り、祝い事ではお酒を飲み、飲酒を善しとする文化があります。また、お酒を飲むと物事が円滑に進むとか、本音が語れるとされていること、何か起こっても「飲んでいたらしょうがない」と済まされてしまうことがあると思います。お酒の良さを伝えることが多い社会で、お酒を飲むことが病気だと認識することは確かに難しいと思います。しかし、今のままではアルコール依存症を抱える人は、医療や福祉、社会の外へ追いやられ、一人で苦しむしか道がなくなり

ます。アルコール依存症を抱える人が、適切に治療につながることで、病気を管理し健康な人々と同じように自分の人生を過ごせるようになる（これを「回復する」と言う）には、本人や周りの人たちの、アルコール依存症は病気だという認識が重要です。私たちも、まだまだ知らないことが多く勉強中ですが、アルコール依存症が病気だという認識が、社会に広まってほしいと願っています。

*アルコール離脱症状…眠れない／怒りっぽくなる
／けいれんを起こす／動悸がする・血圧が高い・不
整脈がある／疲れやすい／幻覚を見る／指先が震え
るなど

【参考文献】

*アルコール依存症に関する12章／斎藤学／有斐閣
新書 1986 年

*よくわかるアルコール依存症－その正体と治し方
－／森岡洋／白揚社 2002 年

【参考 web】

*アルコール依存症（鹿児島県精神衛生センター）

<http://synapse.ne.jp/~sein/T/T01.htm>

2. 活動を通して感じたこと

2-1. 運動の中のハラスメント

鍋谷 美子

——Aさんは活動にかかわりだして何年もたつ、熱心に参加しているメンバーの一人だった。ある日私は、Bさんからちょっと話したいと言われた。Aさんがしんどい。酒の席で、酔ってもものすごい罵倒をされる。いやになる、と。少しして、活動のメーリングリスト（ML）上でAさんが、一緒に活動するCさんの行動を咎めたうえ、「自分で処理する自信がないことを勝手に決めてはいけません」とその行動を‘たしなめた’。一緒に活動しているメンバーに、まるで先生のような言い方で。実際はCさんはAさん含む何人かのメンバーに相談した上での行動をしていたので、他のメンバーが、「Cさんが勝手に決めて行動したわけではない」と説明し、あの言い方はおかしいのでML上で謝るよう促すと、「本人には謝った」と言ってそのままにされた。

その前後から、活動のあり方についての不満や嘆きのようなものを、誰かへの返信の中に混ぜてメール上で表明されるようなことが増えていた。しかし直接、会議などでは話しては来ない。Aさん自身がいらいだけしている。まわりはAさんが話しにくくなっているを感じる。さらに、あるメンバーとの決定的なメールのやり合いが起こる。Aさんが深夜にお酒を飲んで執拗にメールを書くという状況だったので、それは絶対にやめて、話し合いの場をつくるからそれまで、とくにメールではやりとりしないでほしい、と頼んでも、「分かった」と言うがまた「ついうっかり」書いてしまうという状況。これは自分でそういう行動をコントロールできないのではないかと思い、アルコールも含めどこかで相談した

方がいいのではないか、と提案したりもした。

Aさんの言い方、やり方はおかしいよね、と何人かで集まったときに話になり、さらにそのことで困っている人が会の活動外でも身近にいるという話になった。その何人かとも話す機会があり、聞いてみると、事態は思っていたより深刻なのだと感じた。Aさんは、相手が何かをできないということを理由に罵倒することが多く、その対象は個人で、かつ後輩などAさんが自分より立場が下だと見なした人に向かっていた。何人にも話を聞いていくと、以前から、酒を飲み、深夜に何時間も電話で罵倒されたり、何人もいる場で相手を罵ったり、泣くまで追及されるなどがあったことが分かった。ただ、その頃罵倒されていた人たちがそのことを問題として出すことはできなかった。お酒の席でそれが起こっているということで、お酒のせいにされていたということもある。しかし、「あの人はそういう人だから、しょうがない」で済ませてしまう周りの意識が、そのことが問題とされない土壌作りに役立っていた。周りのすべての人が、その土壌をつくっていた一員だった。

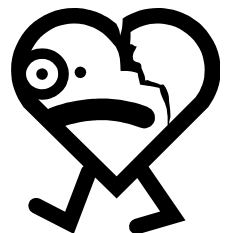
その後活動のやりかたに対する見解の違いもあることが分かり、しかもそれは野宿している人の健康にかかわる、そして不利益になるようなことだった。これは事態が深刻だとML上ではなく、話し合いの場を設定して、何度も話し合った。そこでAさんは自分がしたことについては謝るのだが、それには自分をそうさせた相手の言動がある、ということを必ず言うのだった。悪いのは本当は、自分に暴力的言動をさせた相手なのだと。

また、その過程でも話し合いの場以外の個人攻撃はやまず、学生を利用してスパイのようなことをされたりしたこともあった。話し合いが通じず、あまりにも会の活動に支障があると判断し、最終的には第三者に同席してもらって話し合いのうえ、退会し

てもらうことになった。その後も、会の活動以外の場で会への「うらみつらみ」について会のメンバーに告げたり、自分を攻撃するならやってみろ、全力で闘う、などこちらが何も言っていないのにわざわざ直接脅してくることもあった。会としてではなく、個人としての関係で話し合おうと思っていた人も、怖さと不信で関係自体がつくれなくなっていった。良い関係とはほど遠いものが、間に残ったままの状態だ。

* * *

これは一つの小さな会で起こった一時点のことを切り取ったものだ。こういう状態をどう考えたいのか、といろいろ調べてみると、「モラルハラスメント」という概念に行きついた。それはAさんの言動にことごとくあてはまると思われた。こういう話をする、他の活動現場やその周辺からも、同じようなことが起こっている、と声があがる。攻撃はやりやすい相手を選んだ差別集中的なものであり、周囲にはその人が誰かを攻撃しているとは分からない。それは腕力や目に見える傷の残る暴力ではなく、電話やメール、個人間でのやりとりの中で行われ、言葉で相手を傷つけるという形を取る。話し合いをしようとしても、拒否されたり開き直られることもある。行為を謝りはするが、原因は相手にあるのだと言われることもある。そして、被害者は孤立したり、その現場を去ってしまった後に事態が気づかれることもある。



人の痛みに気づくことはすごく難しい。しんどい思いをしている人が、そこかしこに、やっぱりすごくいる。しかも気づかれず。だからこそ、気づいた

人が、声をあげてこの問題をきちんと表に出し、取り組んでいきたいと思う。問題を表に出すことによって、さらに攻撃が酷くなることもあるが、出してしまうことで、同じ思いを持った他のなかまとつながれることがある。このことを報告書に文章にして載せるのも、そういう行為だと思っている。きっとここで書いたことは、特殊な人の特殊なことではない。もっと普遍性のある、学校や、サークル、職場、家庭——日常のそこかしこで起こっていることだと思う。みなさんもぜひ周りを見渡してほしい。あまり発言できていない人がいないか。その人は誰かから強くものを言われていないか。いつの間にかその場を去っている人がいないか……。

もう一つ、運動の中で起こるハラスメントだからこそその困難もあるのではないか。「運動」ってなにか。この社会のこのしくみはおかしいぞと思って人が集まり、行動する。大きな権力に対して、声をあげていたり、実際に抗議活動をしたり。そこに集まる人たちは、そのことがすごく大事だと思っているからこそ参加するのであり、その中で起こったつらいことに関しては自分のしんどさより、運動（と、それでよくしたい社会）を優先させてしまうのではないか。それは嫌なことがあっても、そこからなかなか逃げようとしめないことも意味する。と、同時に、周りの人間は、同じような意識を持って集まったなかまの中に、暴力的コミュニケーションをする人がいるということが受け入れがたいのではないだろうか。実際には個人にハラスメントをしていたとしても、その人が関わっている活動が社会一般的には「善いこと」「正義」だったり、しかもその運動をひっぱっている立場の人だった場合には、さらに周りはその人を擁護してしまうだろう。原因は、被害を受けた側にある、と言ってしまうこともあるだろう。そうしてますます、暴力は隠され、被害は表に出づら

くなる。

だからこそ、私はこの問題をずっと取り上げ、発信していきたい。このことをきちんと自分たちの問題として、考え、取り組んでいかないと、運動そのものが酷く矛盾を抱えたままで、いつかは破綻してしまうと思う。時間がかかっても、自分たちの中にある差別や抑圧の問題に取り組んでいかないままでは、「解決」は必ず誰かを排除して成り立つ、嘘にしかない。自分の中に、ふかく染みこんでいる差別感覚があるのをそろそろ認めないといけないんじゃないだろうか、と思う。そしてそれと向き合っていきたい。そのためのなかまを、つながりをつくりたくて、この文章を書いている。

参考：【本】

* 「なぜ男は暴力を選ぶのか」ドメスティック・バイオレンス理解の初歩 沼崎一郎

* 「モラル・ハラスメント」

マリー・フランス・イルゴイエヌ

* 「ハラスメントは連鎖する 「しつけ」「教育」という呪縛」安富歩・本條晴一郎

【website】

* 「いじめはモラハラ」

<http://morahara.nukenin.jp/>

* 「こころのサポートセンター・ウィズ」の「虐待・暴力」のページ

<http://www5a.biglobe.ne.jp/~with3/gyakutai/gyakutai.htm>

2-2. 原発事故の背景に

野々村 耀

夜回りをしていると、体のどこかに具合の悪いところのない人は少ないように感じます。ゆっくり話ができると、中でも労災事故にあったが、労災扱いされず、後遺症が残っているという話になることが少なくありません。

武田さんも、そんな一人でした。細かなことは思い出せないが、作業現場でクレーンに吊ったものが膝に当たり、半月板が割れた。その後遺症が今も痛むから、といってよく酒で痛みを紛らわしていました。「ちゃんと労災で治療したの？」と聞くと「それは無理や・・・」という返事だった。



いまは、そういう日雇いの仕事も少なくなって、神戸でも、手配師がやってきて労働者を集めていた場所に仕事を求めて労働者が集まることもなくなったようだが、以前は下請けの下請けの何重もの下請けの末端ではたらく労働者はそういう場所で一日だけ雇われて、働きにいった。

頭数をそろえるために手配師は、役に立ちそうな人を選んで連れていったが、仕事が多く人の足りないときは誰でも雇って現場に連れていった。

大きな建築会社は、公共事業や、大規模な仕事を落札し、大きな利益を懐に入れて、実際の仕事は下請けの会社にゆだねる。その会社もまた、利益を抜

いて、孫受けに仕事を与える、その会社もまた、・・・そのようにして、次第次第に仕事は細分化され、利益は差し引かれ、値段は下がっていく。人件費も受注時には何万も計上されているが、実際に働く人が受け取るのはほんの僅かになってしまいます。

一番下の会社は、さらに手配師（註1）を使って現場で作業する労働者を集めることが多いのです。

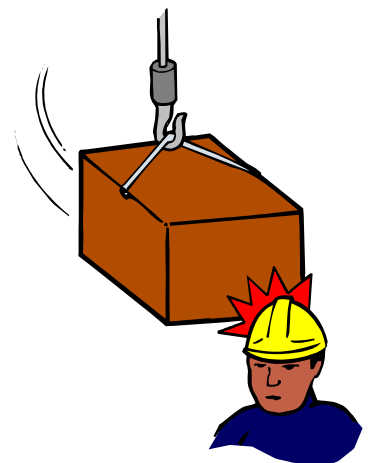
労働者は、好景気で、人が足りないときは別として、高齢化したりすると、顔見知りの手配師をとおしてしか仕事につくことが困難になります。顔見知りでない人から仕事をもらうことはあまりありません。

時々、「仕事をもらっていた親方が、年をとって仕事をやめたので、もう仕事をくれる人がいなくなった」という話を聞きます。

そんな労働者が、武田さんのように現場で怪我をするとうなるのでしょうか？ 親方（手配師）は労災に入ったりしていないから、労災で治療はできない。労災扱いにしようと思えば、仕事をくれた会社か、その会社の上の会社、あるいはもっと上の会社の労災保険を使わなければなりません。そうすると、その会社は労働基準局に事故があったとわかってしまう・・・。もし、その手配師が仕事を請け負った会社にたいして労災扱いにしてほしいなどといえ

「お前には、もう仕事はやらない」「出入りさせない」ということになりがちです。

そこで親方は、怪我をした労働者に「悪いようにはしないから、労災は申請するな」「わしが治療費は出してや



る」などと言って、病院に連れてゆき、応急の手当の費用だけ支払って御終い。そのあとは放置されたり、親方の部屋で何日か休まされたりします。

僕の知っている人は、かなりの怪我をして親方の家で一週間休んでいたら、「いつまで遊んでいるんだ、仕事に行け」といわれた、と言っていました。

「労災の手続きをしようか？」というのと、「そんなことしたら、もう働かせてもらえなくなるから、労災はいらない」と何人もの人にいわれたことがあります。

こんなことを書くのは、今年3月11日の原発事故の後になって思いついたのではなく、以前から原発で働く労働者のことが気になっていたからです。電力会社は、一人一日数万円の費用を出しているとのことですが、実際に被曝しながら働いている労働者は、数千円しか受け取れないようです。

公になったケースは少ないようですが、原発の仕事だと知らされないで、連れて行かれた人もいます。また、原発で働いていたのに、どれだけ被曝したか検査しようとしたら、かなりの人が連絡もつかなくなっているという報道もありました。ネットではその人はもういないのだなどという噂も流れていますが、実際のことはわからないままです。東京電力は、国会の委員会が事故時のマニュアルを見せるように求めると、墨を塗って読めなくした資料をだして、知的財産権や保安上の理由を口実にしたりしましたが、本当のことを明らかにしない方針のようで、原発の中で誰が働いたのか、どれだけ被曝したのかもはっきりしない有様です。

定期検査のときなど原発で放射線を浴び、一番危険なめにあいながら働くのはほとんどの場合東電の社員ではなく下請けの下請けのうんと下請けの日雇いの労働者や原発から原発へと移動する労働者なわけです。何人かの人が、原発労働者の状態について

本を出したり、写真集を出したりして、警告してきましたが、関心を持つ人は非常に少なかった。そして、311以降急に、「それはひどい」という人が増えました。それはそうだが、ひどいのは東電だけなのかとも思うのです。



実は、原発だけでなく、末端で、危険な仕事をしながら、事故があってもちゃんと治療できなかったり、労災を受けられない人は少なくない。そういうことを、見過ごしにしているという土台の上に、大事故が起こると思うのです。

個人的なことですが、職業訓練校を出て、家具工場に就職したとき、手押しカンナ盤（註2）という、刃が回転している上を木材をすべらせて、平面にする機械を担当するように言われました。訓練校では、刃物の上にはカバーが付いていなければならない、とか、素手で材料を抑えないで、押さえる治具を使うことなどと習ったのですが、どちらもないので、工場長に「こんな風に習ったのですが」というと、すぐに治具は作ってくれたのですが、カバーは工場内に見当たらないから我慢してくれといわれました。休憩時間に、同僚に「工場長はすぐに治具を作ってくれた」というと、「あんたの前の人は一週間前に指を落としたからな。」といわれました。もう、ず

いぶん前の話ですが、阪神電車の高架下、御影駅のそばの工場でプレス工をしていて、左手の指を3本プレスに押しつぶされて失いました。今思えば、安全教育などまったくなかったし、安全装置も電源が切ってありました。そのころ、一年間に3%のプレス工が事故に遭っているという統計を見たことがあります。20歳から60歳まで40年間働くと、120%の人が事故に遭うわけです。それでも現場では安全より能率という空気が蔓延していました。

大きな事故や事件があると、マスコミや行政は口をそろえて批判しますが、同じことを日常的に行っているのです。

安全だけでなく、収賄や談合など、日常的に行われています。

私たちはそういうことを許している職場環境、企業社会の風土で暮らしており、それを許しているのも私たちです。

ハインリヒの法則 という有名な法則や、そのほかの研究があります。重大な事故が一件あるとき、背後に29件の軽い事故があり、その背後に300の異常がある、というものです。その他の研究も、数字は違いますが一つの重大な事故の背後には多数の軽い事故・事象があるという点では共通しています。

私たちの日常において、特に職場で、労災や過労死のもとになる過酷な状況があることは明らかです。そうしたことが、福島原発事故の背後にあると思わざるを得ません。それを何とかしようと思わない限り、同じことを繰り返すでしょう。

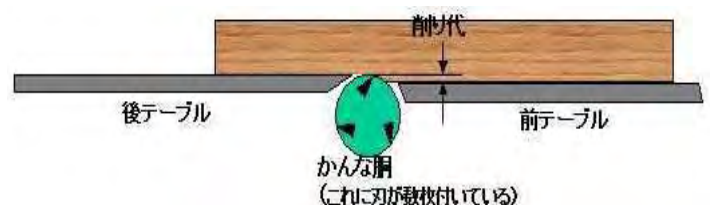


もう一つ、スリーマイル島事故、チェルノブイリ事故、福島の事故、これらが一番重大な事故でなく、軽微な事故だとしたら、本当に重大な事故はどのようなことになるのだろうと、思います。

註1 手配師：[広辞苑より] 公共職業安定所を通さず、労務者を集めて、雇用主にあっせんすることを業とするもの。

[ウィキペディアより] 人材斡旋者を指し、合法、非合法のどちらに置いても手数料を取って人材を周旋する者。現在では合法的なものを労働者派遣事業（人材派遣業）といい、社会的に問題のあるものや古くからある職業において手配師と呼ぶ傾向にある。

註2 手押しかんな盤：回転する鉋の刃の上を木材を滑らせて平らにする機械。



2-3. 活動外で会う人たち

西野 和

私は、夜回りは初めて行ってから、ゆるく続けて1年くらい。ここの夜回りの範囲とは駅5つくらい離れた場所に住んでいます。バイトを始めて、通りにいっぱい荷物を抱えて駅前に座っているおばあちゃんを、よく見かけるようになりました。その経験とそこから思ったことなんかを書きたいと思います。

◎ 私の経験

バイト先（炊き出しや相談などしている武庫川河川敷の近く）の近くに、よく駅の前に座っているおばあちゃんがいます。大きな荷物を持って、困ったような顔をしながら空を見ている。いつも気になりつつも、そのまま通り過ぎてしまう。

家の近くの人というのは、なかなか声をかけづらい。活動外だし、仲間もいない。なかなかハードルの高いことです。それでなんだかんだと言い訳をして、いつも通り過ぎていました。でも、やっぱりずっと前を通っていると気になるわけです。

そこで、その旨を夜回りのメンバーに相談してみた。「確かに声はかけづらいよね。なにかきっかけとか、話しかけるネタがあるといいよね。びらをもっとると話しやすいよ」というアドバイス。おおそうだ！と思い、さっそく団体に連絡をとってビラをもらってこよう！と思ったら武庫川のビラ自体がなかった。存在しなかった…。かと言って断念するというのも変なので、私が今ビラを作っています。

◎ 活動外で出会ったらどうする？

・活動団体が近くにある場合

自分たちの範囲外・活動外でテントや、そこにいる人を見かけたときはまず近くの活動団体に連絡を

としてみるのが一番だろうと思います。その団体もその人のことを知らなかったのなら、その団体に訪問することができるし、知っていればそれでいい。

個人的に何かしたければ個人的に関係を作っていけばいいと思います。それから、こっちから本人に話しかけるとときには、前述のとおりその団体やら炊き出しのビラであったり、なにか紙として残るものをもっていくといいと思います。手軽に情報保証ができていい！

◎ 活動団体が近くにないとき

近くに活動団体がいればそこを紹介すればいいんですけど、ないときはその市や地域の福祉事務所を紹介すればいいと思います。民間の団体がなくても役所は対応しているはずなので。でもあまりちゃんと相談を受け付けてくれない自治体もあるので注意。そのほかには、その地域で活動している団体でなくても紹介するというのもありだと思います。その地域のことや実際に会って、というのは難しいかもしれないですが制度など、電話などでの相談でもわかることはそれなりにあると思うので。

「近くにすんでるんですよ～」とか適当に話しかけて、話を始めるといいんじゃないかなーと思います。そのとき、ビラにあたる、福祉事務所や相談窓口の場所を書いた紙を持っていくといい！その後も適当に声をかけたりして、お話をして、なにかお互いにとっていい関係ができればいいんじゃないのかなと思います。

◎ ビラを持っているって大切

今回私はビラを作ってたんですが、それはやっぱり、ビラって大切だと思うからです。ビラは、情報源として大切なのはもちろんですが、あることでそれを持ってきた人にある程度の信用がでるというのも大切なことと思うんです。文字として、活字とし

て自己紹介と、連絡先があればとても安心。活字でしっかりと情報が形になっているのは大きい。手軽に情報保証もできるし。結局、なんだかしっかり話せず追い返されてしまった—こういうときにも、ビラさえ渡せば「あ、この人はこれを伝えたかったんだな」というのがわかる。ビラってすごい。

◎ 活動団体の人なのか近所の人なのか

話しかけると、私は神戸の夜回り活動をしている団体の人じゃなくて、近所の人ってことで行きたいな—と思います。前提としては近所の人。ゆったりと自分の出来ることをやりたいし、夜回りしてるかどうか関係なく単純にいつも通ってて気になるから話しかけたい。

◎ 私たちの活動は支援という言葉に

当てはまるか

夜回りは支援活動なのか。そもそも支援ってなんなんだ。この文のなかで支援という言葉は使っていない。なぜかという支援というのに違和感があるから。“支援” 一方的な give というイメージ。私はあくまでお互い楽しく話せる、お互いにとっていい関係がいい。たぶん相手にとっても“支援” されるというのも変だし聞いた感じ嫌な響きなんではないかと思う。

でも、私たちの活動を知らない人に、私たちの活動はなんなのかと聞かれてズバリ一言で答えようとすると、野宿者支援の団体と言ったりする。個人的に関係がある場合なら、よく話したりするよという説明で大丈夫と思うのだけれど、団体として何をやっているかと言われると、支援かなあとなる。でも、私のような意識をもった人の集まりならば支援団体というのかな？ じゃあズバリ説明する言葉はなんなの？ と聞かれても、うーんないなあ。と。 きっと、私たちの活動を支援という言葉には当てはまらなく

て、ズバリ説明できる言葉もないんだろうな。

◎ 気軽に話せるような社会を

普通、はなすきっかけがないと話しかけづらい。そこにいる人にもっと気軽に話しかけられるような社会がいいですね。

私は自転車旅行が趣味で、仲間と一緒に野宿しながら数百キロ走ったりしているんですが、このときにはいろんな人に話しかけてもらって、助けてもらったりします。特におなじく自転車をしている人にはよく声をかけてもらいます。ヘルメットもらったこともありました（山口県にて）。パンクして困ったところ空気入れを借りてきてくれたおじさんもいました（西宮市にて）。こういうとき、とても嬉しいしこういう助け合いがあって、世間は冷たいとか言うけどそうでもないな、と思えます。



でも、おそらく、こういうときはきっと「一生懸命走っている旅の若い子」に話しかけているか、「自転車をしている仲間」に声をかけている。この枠外で話しかけられることはほとんどない。この枠内なら、きっかけや、なんか困ってそう…とかなくても話しかけられることも多い。自分の地域の人とか、あんまり話さないし、仲間意識の中に「同じ町に住んでいる」というのは入らない。この「同じ町に住んでいる」という仲間意識が入るようになれば、それから仲間意識とかなくても気軽に話せるようになるともっといい社会になっていくんじゃないだろうか。こんな単純な話ではないと思うけど、野宿の人、みんなもっと生活しやすくなるんじゃないかなと思います。

3. メンバーのその他の活動

3-1. 神戸と東北～野宿者と被災者

臺 信一郎

東日本大震災後、個人的に何度か被災地に向かい物資搬送や足湯の活動をしてきました。足湯ボランティアというのは、阪神淡路大震災で鍼灸師のグループが始めたもので、たらいの湯に足をつけてもらい、手や腕をほぐして疲れをとります。避難所で生活していた人の多くは仮設住宅や親戚のもとに移り、僕が活動してきた範囲でいえば、被害を受けた地域の凄まじい光景もだいぶ変わってきたように思います。初期の混乱した状態からはかなり落ち着いた様子に見えます。けれど、人の暮らしには課題が山積みです。ここでは避難所や仮設住宅で知った問題点についていくつか述べたいと思います。



<生活保護打ち切り>

阪神淡路大震災のとき、神戸市では避難所での生活保護の申請が受け付けられませんでした。災害救助法により最低生活が保障されているというのがその理由でした。けれど、避難所で支給されるのは実際は食料くらいのものです。プライバシーもなく、被害によっては水が流れなくてトイレも流せない、

電話もつながらない、着の身着のまま逃げてきて着替えもないなど、生活する上での支障は多くあり、とても最低生活が保障されているとは言い難いです。

東日本大震災では、被災者に対する生活保護の運用について厚生労働省が

「今般の地震により本来の居住地を一時的に離れて遠方に避難している場合、避難先の保護の実施機関が実施責任を負い現在地保護を行うものとする。」

とし、さらに

「被災者の状況を十分配慮し、生活保護の申請意思が確認された場合においては、申請権の侵害がないよう留意の上、迅速に対応すること」

という通知を出しています(平成 23 年 3 月 17 日付 厚生労働省社会・援護局長保護課長通知)。これを見ると、避難所での生活保護の申請権が認められていることがわかります。さらにその後に出された保護課長通知(平成 23 年 3 月 29 日付)で

「避難所で保護費を支給する場合、必要な保護費を遺漏なく支給すること。被災状況によって、生活実態の把握が十分できない場合も考えられるが、被災者の特別な事情に配慮し、不足が生じないよう配慮すること」

とあり、避難所で保護を必要とする人に配慮した通知がされています。

また、生活保護受給中の義援金・支援金等の収入認定について少し触れたいと思います。生活保護法では、原則的にその世帯に入ったお金をすべて収入とみなすので、世帯主が働いて得たお金だけではなく、親や兄弟からの援助や年金収入なども、収入と認定され申告する必要があります。ただし、冠婚葬祭などの香典や祝い金などは、対象外になります。東日本大震災での厚生労働次官通知では、「災害等によって損害を受けたことにより臨時的に受ける補償

金、保険金又は見舞金の内当該被保護世帯の自立更生のために当てられる額」は収入認定しないとしています。この際「自立更生計画書」の提出が求められます。

しかし、このような通知がされているにも関わらず、震災で義援金を受けとったり、避難所で暮らしていることを理由に生活保護を打ち切られる問題が起きています。以下のような報道がありました。

▽2011年6月4日東京新聞より抜粋

宮城、福島両県で、生活保護受給中の被災者に対し、避難所生活で住居費がかからないことや、義援金を受け取ったことを理由にした保護の廃止や停止が相次ぎ、少なくとも7例あることが分かった。

福島県南相馬市の男性は、義援金や東京電力からの賠償金の仮払いが収入とみなされ、5月25日に生活保護を廃止された。名取市の避難所の男性（69）は避難所生活で住居費がかからないことを理由に5月1日付で保護を停止された。

また、義援金や東京電力福島第1原発事故の仮払い補償金が収入と認定され、青森、岩手、宮城、福島、茨城の5県で実際に生活保護を打ち切られたのが458世帯に上るとする調査結果を日本弁護士連合会が公表しています。（毎日新聞 2011年10月25日 東京朝刊）

義援金は収入認定します。
それで自立してください。

生活保護は打ち切ります。



自治体によって運用が異なる部分もあるようですが、避難所にいることや義援金等の一部を受け取っ

たことを理由に生活保護を停止されるというのは、適切な運用とは思えません。義援金などは一時的なお金ですし、「お金が無くなったらまた受けられますから」ではなく、長期的にその人が安心して暮らせるような対応をして欲しいと思います。

今回被災地にボランティアに行き、避難所や仮設住宅でいろいろな人と会って話しましたが、収入などの話はあまり出ませんでした。それは、お金のことで困っていたり不安を感じていても、若者相手だと話しづらい、話しても仕方ないと感じるからかもしれない。またそういう相談を仮に受けても自分自身分かっていないことが多く、具体的に何か力になるというのは難しかったと思います。身近に相談できる人や情報を得ることのできる場が必要だなと感じます。

<孤立>

阪神淡路大震災では「孤独死」が大きく問題として取り上げられました。今回の震災でも、避難所から仮設住宅に移った時に、家のなかに閉じこもってしまう人のことが気になります。集会所もできていないところが多く、人が集まって話をしたりするという場が無いことも問題です。ある仮設住宅では、同じ避難所にいた人たちが玄関に黄色い旗を置き、それで知り合いを見つけるための目印にしていました。巡回相談員はいますが、すべての仮設住宅に目が行き届いているのか、疑問です。

孤立することと深く関係しているように思えるのは、アルコールの問題です。以前仮設住宅で足湯をしたときに、「住民のなかにお酒を飲んで大きな声を出す人がいて困っている」という話を聞きました。

「その隣に住んでいる人は役所に訴えたが、（物損などの）具体的な被害がないと対応できないと役所に言われ、別の場所に移っていった」ということでした。震災によって親しい人や家を失った絶望や、仕

事も無く、知り合いもいない状態で、家に閉じこもりお酒にのめり込んでしまっている人が少なからずいるのではないのでしょうか。結果的には自身の健康を崩し、近隣の人との関係も悪化し、さらに孤立するという悪循環に陥ってしまいます。

野宿をしている人でも、居宅に移って孤立してしまうことがあります。野宿をしているときは周りに知り合いがいて、その人なりの人間関係があっても、居宅に移ることでそれが切れてしまう。一人であるというのはある意味では気楽だけれど、誰にも頼れないというのはすごくつらい。以前アルコール依存症の人の話を聞いたとき、その人は「一人では全然止められなくてこのまま（体をこわして）死ぬしかないと思っていたけど、自助グループに入り、自分と同じような体験をしている人に会って、お互いの経験を話しているうちに少しずつ自制できるようになった。」と話していました。人の行動は、その人だけの問題ではなくて、周りの人との関わりのなかで変化するものだと思います。その関わりが無くなると、歯止めが効かなくなる。そんな悲しい結末を無くすためにはどうしたらいいのだろうと、野宿している人が居宅に移ったときや被災地で仮設住宅を訪問したりしていて思います。



【参考文献】

* 生活保護「改革」ここが焦点だ！

生活保護問題対策全国会議（監修）／あけび書房

3-2. 被災者になれない？人達

野々村 耀

1995 年、阪神淡路大震災の被災者支援活動が現在の神戸での夜回り活動のきっかけだったことについては何度も書いてきました。

阪神淡路大震災で気づかされたこと

同じように困っていても、罹災証明書を持っているかないかで、救援の対象になるかならないかが決められました。住んでいた家が壊れたという証明書（罹災証明）があれば被災者、なければ被災者でないとされます。したがって、震災の時に住む家がなかった人は（家が壊れなかったから）罹災証明をもらえなかったし、それゆえに「被災者」対象の救援物資や食料をもらえなかったし、避難所に入れなかったのです。中には仮設の診療所のある大きな避難所のフェンスのすぐ外で、被災者でないからと医療を受けることができなくて亡くなった人もいました。避難所に入っても「不適格者は出ていくように指導する」という行政の方針で追い出されたり、留まろうとすると避難所で配られる給食さえ止められるということもありました。まして、仮設住宅や震災復興住宅には入れませんでした。そのような排除の姿勢は、行政だけでなくボランティアにもあり、「うちの避難所にはホームレスはおらへんで」と自慢するとか、「あっちのテントには（物資を届けに）いかんでもええで」「あの人らは、震災前から公園にいたんやから」などということもありました。ついでに言うと、避難所にいた、オーバーステイの外国人も、行政の調査があると、出ていかざるを得ませんでした。

同じく困っている人なのに差をつけられないと思ったいくつかのグループが其の後、野宿している人

の支援を続けることになりました。

野宿しているところを訪問して、安否を尋ねたり、医療や生活保護を受けにくい人の手伝いをしたりしながら、こういう問題を社会に訴えることも、活動の一環だと思って、この報告書を作ったりしています。

その過程でつくづく考えさせられたことがあります。これは神戸だけのことではないだろうということです。どこかで、災害が起こったとき、そこでも同様のことが起こるのではないか、キット起こるだろう。困っているのに被災者として扱われない人、制度のすきまで無視される人。その時になってあわてて、行政に掛け合っても間に合わないから、災害が起こる前に行政と話し合い、非人間的なことが起こらないようにしておく必要があるということでした。

それで、メーリングリストやインターネットで呼びかけました。「あなたの町で、災害が起こったら、家のない人が、差別され救援から排除されないか確かめてくださいますか？ 人間らしく処遇されない方針なら、災害が起こる前に行政と話し合ってほしい」と。しかし、残念ながらあまり反応はありませんでした。

災害が起こるたびに、このことが心配でした。東日本で大災害が起こり、はじめ同じことを思いました。今回も、排除される人がいるのではないかと。しかし、あまりの災害の大きさに呆然としました。

それだけでない

やがて制度のすきまで排除されるのは野宿している人だけのことでないと気づかされました。

どこかに線を引いて、その内側の人だけを助ける。その外は知らないという扱いは、様々に姿を変えて起こるのですね。

長い間、原因別に処遇するということに対して、

結果が同じなら同じにすることはどうだろう、と思ってきました。公害の被害でも薬害でも、原爆の被爆でも、理解できない線を引いて、あなたは入る、あなたは入らないという扱いが行われています。「嘘をつく人がいる」、「だまして支援を受ける人がいる」などと言って「厳密な？」基準を理由に人を振り分け、人の切り捨てがおこなわれています。

夜回りをしたり、生活保護を受ける手伝いをしていると、「自分はこんなにつらいのに、医者は何でもないという」という訴えを聞くことがよくあります。働けないほどだるくて仕方がない、手が痛む、足が動きにくい、様々なことを聞きます。医者がそれに病名をつけてくれると、何らかの支援の対象になる。しかし、医者が「病気ではない」と診断すると、苦しんでいる当人にはどうしようもありません。福祉事務所の人も、「医者が病気でないといっているから、あなたは病気ではない」といいます。



しかし、長い間病気だと認められていなかったが、最近の研究によって病気だとわかったという事例はたくさんあります。どのような仕組みで頭が痛くなるかが分かった、などということがあります。それまで、長い間病気だと認められなかったのが、ある時認められるのです。それまで、苦しんでいる人はうそつきのよう、あるいは怠け者のように扱われるのです。僕らも、医者が病気でないと言っていると聞くと、その人が苦しんでいることが分からなくなることがあります。認められないと、苦しんでいる本人にはどうしようもないのです。

学生時代に何度か広島に行き、被爆した方の話をうかがいました。見たところ元気そうだが、本人はしんどくて、働くことができない。月に二日くらいしか仕事に行けない。行くとつらくて倒れてしまう。周りからは怠け者だといわれて、つらいということでした。そのときはじめて「ぶらぶらやまい」という言葉を聞きました。

公に認められないために苦しんでいる人がいること、そういう人が切り捨てられないあり方を求めていきたいと思います。

3-3. イギリスで教育費削減反対

学生デモに参加して

田宮 遊子

2009年10月から2011年9月までの2年間、イギリスで暮らしていました。この間、日本では震災と原発事故が起こり、私は、インターネットで得られる日本からの情報と、イギリス等欧米のジャーナリズムからの報道をむさぼるようにみていました。日本を外から冷静にみていたというよりも、原発への怒りと自身の無知を痛烈に感じながら、自分のもっとも馴染みの深い土地への執着のようなものにとりつかれていた気がします。

これとは対照的に、イギリス滞在中に経験した市民運動のうねりは、一時滞在者の気楽さと好奇心で、その場に居合わせたことに幸運を感じるものでした。もちろん、イギリスで暮らす人たちは怒っていました。

イギリスでは2010年の5月の選挙で、1997年から続いた労働党政権が敗北し、保守党と自由民主党（両党の中間的位置にある政党で、個別の政策はどちらかというと労働党寄り）の連立政権が発足しました。この連立政権は、財政赤字削減を最重要課題

とし、社会保障制度、教育、コミュニティ・サービスなどの生活に直結する政策の予算削減を打ち出しています。これに対して、イギリス全土で市民が怒っています。その怒りは、デモ（イギリスではプロテスト・マーチ、あるいは単にマーチということが多いです）やストライキという形でも表現されています。

最近では、ニューヨークのウォール街占拠に共鳴したオキュパイ・ロンドンに次いで、公務員の年金カットに反対する大規模なデモが実施されたばかりです。

そして、これらのデモの先駆けが、大学の学費大幅値上げへの怒りの抗議活動でした。イギリスではほぼ全ての大学が税財源と学生からの学費収入で運営されており、各大学の学費はおおむね横並びになっています。税財源に頼らない、いわゆる私立大学は1校しかありません。学費に関しては、前政権（労働党ブレア政権）期に導入され、毎年引き上げられ、年3千ポンドとなっていました。これに対して、新政権の改革案は、国庫補助を減らし、そのかわりに、各大学は9千ポンドまで学費を引き上げることができるといふものを打ち出しました（この文章を書いている2011年12月の為替レートは1ポンド120円台と、ものすごい円高なので、単純に日本円に換算した金額と、イギリスでの価値にはずれがあるように思います。）。

くわえて、16歳から19歳までの大学や専門学校に通う低所得世帯（年所得3千ポンド以下）の学生に対する手当（Education Maintenance Allowance, EMA、教育継続手当）の廃止も打ち出されました。EMAは、労働党のブレア政権が創設した手当で、小額ながらも（週10〜30ポンド）、学生本人に直接支給されるものでした。この手当のおかげで、低所得世帯の若者は、学業や職業訓練をするために必要な交通費や教材費に支出するためのお金を得ることが

できたわけです。

学費を一気に 3 倍値上げ、低所得世帯の若者向け手当も廃止、なんてことになったら、金持ちしか大学に行けなくなる、学生ローンで大学に進学すればこれまで以上に重い借金を背負うことになる、すべての若者に教育機会を！と怒った若者たちは、街に出て抗議をし、大学を占拠しました。反学費値上げの抗議行動は、イギリス全土に広がりました。

怒った大学生たちは、大学の一部の教室を平和的に占拠し、長いところでは数週間続きました。大学側がこの案に反対すること、学生の意見をきくことなどを要求しました。

2010 年の 9 月にロンドンで最初の大規模な抗議デモがありました。5 万 2 千人が集まったとされています (NUS, 全国学生組合の発表)。

その後、ひと月に 1 回程度の大規模なデモが全国各地で行われました。イギリスでもこれほどの学生たちの大規模なデモは、サッチャー政権期以来ともいわれました。

私が所属していたバース大学では、数名の学部学生が 2 日間学内で座り込みをするという小規模な占拠がありました。また、学生たちは学長に学費値上げ反対の要求書を提出、大学と話し合う場も要求し、その結果、数回にわたる交渉の場が設けられました。バース大学他、数校の大学の学長は、学費カットの法案成立の前に、今回の学費値上げには従うという、私たちにとって非常に不本意な声明を発表したのですが、これに対しては学生のみならず、一部の教員たちも明確に抗議をしました。また、2 大学共催で抗議デモも実施されました。学生デモの全国共通のスローガンのひとつが “No ifs, no buts, no education cuts” (「弁解も言い訳も許さない、教育費削減反対」といった意味でしょうか) でした。こ

のスローガンをデモに参加したみんなで、街を歩きながら、そしてバース選出のリブデム (自由民主党) 議員の事務所前で、連呼しました。デモは初めてという参加者が大半だったのだと思います。デモの仕方、“No ifs…” をはじめとした掛け声のかけ方が書かれたチラシが配られ、デモ初心者や私のような英語を母語としない学生にもフレンドリーで、一緒に一体感を味わえる場となっていました。

教育費削減反対デモには、大学生だけでなく、高校生や中学生の参加もありました。私が住んでいたブリストルという都市では、とくにたくさんの児童、生徒がデモに参加したことで全国紙にも大きく取り上げられました。私もブリストルでのデモに参加したときに、フード付きパーカーを着てスケートボー

ドを持った、ブリストルなまりの強い英語を話す少年たちと一緒に歩きました。NEET という言葉を生んだ国であるイギリスは、日本よりも階層社会による分断が強く、若者の間の格差も大きいです。デモで一緒に歩いて、警察の



騎馬隊と衝突していたかれらが、大学に行くことが可能な層であるかはわかりません。それでも、自分たちの世代の将来への投資を削減する政府に怒りを感じているのです。その怒りをデモの場で共有できたことは、心に残る体験でした。

その後も、抗議行動は様々な形で行われましたが、日本では、今年 8 月にロンドンを中心として起こった若者の暴動が大きく報道されたようです。この暴動を理解するためには、財政健全化をうたう新政権に対する抗議の機運が全国で高まり続けている中で起こったこと、若者たちの政府への怒り、警察からの暴力への反発、格差社会への不満といった側面から捉えることが必要なはずです。このことについては、また機会があれば書きたいと思います。

4. 参加者感想

野宿者の現実

青山 幸夫

夜回りに参加し出した頃、「どんな生活をしているのだろう」「どんな話をするのだろう」「迷惑をかけないようにしないと」など、正直不安と興味が入り混じった感じでした。

そして、実際夜回りを始めてみると、みなさんとても気さくで、私が思っていた以上に話しやすい感じがし、不安な気持ちをなくならせて頂く程でした。しかし、そんな野宿者の人達は、どこに居るのか解らない位の場所で生活しているのです。その原因は、役所に追い立てられているという現実があったのです。正直驚きました。横になれないベンチや橋の下に入れないように柵をしたり、鉄のはしごを取り外したりと日々の生活に苦労している人達に対して、更に生活を苦しめようとするのです。考えられない状況でした。

野宿者に対する苦情がきっかけでもあるそうです。色々と情報を集めた上で問題に対して発言して欲しいのだが、野宿者に関しては、イメージだけで苦情を言われ、もちろん役所も受け入れてしまうのです。

これだけ活動をしている人達や貧困に関する報道があるにも関わらず、偏見を持っている人の方がまだまだ多いのでしょう。

更に酷いのは、最近増加している若者による野宿者への襲撃事件である。おそらく、若者達は安易な気持ちで遊び感覚でやっているのでしょう。そんな気持ちで死に迫いやる事件まで起きているのです。堪ったものではありません。

野宿者は、国に住みにくい環境へと追い立てられ、追いやられた場所で若者からの襲撃に不安を

感じながら日々の生活費を稼ぐことを考えなければいけないのです。もっと野宿者に対する正確な情報が伝われば少しは住みやすい環境になるのですが、この様な事が現状なのです。

私自身が大きく状況を変えることは出来ませんが、参加することで何か少しでも助けになればと活動をしてきました。

私が今接している野宿者の方たちは、とても元気で楽しい人が多いです。

凄く知識が豊富な方もいらっしゃいます。追い立てられてしまう環境で生き抜いているので、生き抜く力が付いているのかと思わせる程です。

しかし、話をしていると仕事がない、空き缶の価格が安い等の収入を得る厳しさを話されるので、表には見せない不安があるのだらうと思います。

もちろん、お年を召されている方が大半になりますので、「調子は抜群や！」と言われておりますが、年齢的に病気に対する不安もあるだらうとも思います。

本当に野宿者の現実を理解して欲しいと感じます。

この環境で生活している野宿者の人の不安を少しでも解消できればとこれからも、私は活動を続けて行きたいと思っております。

もの乞うひとびと

臺 信一郎

僕は大学の農学部学生なのですが、以前にトウモロコシの研究でアフリカのマラウイという国に行ったことがあります。この国はアフリカ大陸の南部にある、南北に細長い国です。一人あたりGDPは日本の0.5%ほどと言われていて、かなり貧しい国です。ここではトウモロコシが主食で、

道を歩いていても、至るところでトゥモロコシ畑を見かけます。人々は気さくで明るい人が多いです。「この国は貧しいけれど平和だ。争いがない。」と現地で知り合った友達は言っていました。

そんな「のどか」で「平和」なマラウイでも、貧しさはすごく強烈に印象に残りました。道を歩いていると物乞いの人（という表現が適切かわかりませんが、お金を求められた人のことをこう表現することにします）によく会います。道端で子どもを抱いた母親がじっと座り込んでいるのにも会いました。膝から下のない人が、両手で体を支えながら車道の一番端のところから行き交う車に向かって声をかけている光景も忘れられません。その人は満面の笑顔で「こんにちは！」と声をかけ続けていました。その笑顔と危険な行為のギャップが印象的でした。

毎日道を歩いていて何人もの物乞いの人に会い、実際に「くれ」というふうは無言で手を伸ばして来られる度に考えていた、というか自分に言い聞かせていたことは「自分がお金を求められる人みんなにお金を渡していたら結局自分自身が物乞いになってしまうし、自分が渡せるお金なんてたかが知れてるんだから根本的には何の助けにもならないだろう」というようなことでした。ただ断りながらももやもやとした気持ちは増していきました。けれど現地の方は割り切っているような様子で、小銭が余っていたら渡すし、無ければ断るというスタンスでした。物乞いの人に対してことさら同情的になるわけでも忌み嫌うわけでもありません。ちなみにマラウイでは日本の生活保護のような制度はないので、学校に行けなかった人は低賃金の単純労働の仕事しかなく、それもできなければ物乞いでもするしかない、ということのようです。こう書くとやっぱり日本のほうが最低限度の生活が保障されていていいと思われるかもしれませんが、日本とマラウイでは貧しい人への視線に大きな違いがあるように感じます。マラウイでは物乞いの人でも社会の一員として認められていて助けられる時は助けよう、という雰囲気があります。けれど日本では野宿している人などの存在自

体が無視されているのが現状だと思います（生活保護は必要とする人に必ずしも行き届いているわけではありませんし）。この違いが一体どこから来るのかはまだ分からないのですが。

現地で物乞いを断り続けることに罪悪感を感じて、一度だけ食べ物を買ってきて渡したことがあります。でもその時に感じたのは「自分はその人のためになることをした」という満足感とは縁のないもので、相手の人がどう思ったのかがわからず漠然とした不安と虚しさが残りました。

海外に出ると少し日本のことを客観的に見れて新しい発見があるし、今回支援ってなんだろうといろいろ考えました。マラウイでは、生活保障などは乏しいけれど、人の自然な交流があって参考になりました。最後に、感想文というか体験記みたいになってしまいごめんなさい。

感想文 “えっ、全員が車で夜まわり！？”

永田 ^{めぐむ} 恵

このグループによる夜まわりに 2011 年の始めに初めて参加させていただいた時に僕が驚いた事はまさにタイトルの如くです、と云うのもそれ迄 14 年以上前から関わっているバプテストの金曜夜まわりでは最大 2 人が車で廻る以外は徒歩で廻るのが常で且つ最近では 1 時間程度で終わるので意外だったのです。とは云え、阪神間の 1 駅間を歩く金曜夜まわりとは違いこの夜まわりでは阪急王子公園から阪神青木あたり迄も廻るのでやはり車の移動が欠かせない事が実際に廻ると解ります。＜長年のペーパードライバーが悔やまれる…（苦笑）＞

しかも、金曜夜まわりでは無くなってしまっているミーティングだけの日のみならず廻る前後のミーティングがかなり充実しているのはホンマに素晴らしい限りですね。

もう1つビックリしたのは野宿を強いられている方の生活形態の差異でして、金曜夜まわりでは最近ドヤ住まいや駅同士をつなぐ地下道を廻る事が主な事もありその場所で生活している人がほとんどおられないのに対してこの夜まわりでお出会いする方々はその場所で居住空間を創出しているところです。やはり、ビル街中と住宅街とではとりまく環境が必然的に違ってくるのでせう。何はともあれ、最近のご無沙汰な事もあり未だ未だ神戸YWCA夜回り準備会(仮)の魅力は僕にとりその独特な名称(笑)共に未知数なのです。

おそらく来年度の活動報告書につづく…

見えない暴力

鍋谷 美子

今回の報告書の文章は、なかなか書くのが大変でした。これまで書けなかったことを、表に出すという作業が加わったからです。書けなかったのには理由があり、読んでもらえれば分かると思いますが、現在進行形で起きているハラスメント被害を書くため、そのことによって二次被害を被るかもしれないからです。なので、実際には書けないこともありました。怖さと、自分が伝えたいこととの間で悩みながらの作業でした。

この報告書を編集し、この感想を書いている間(2012年あたま)には、東京、江東区にある堅川河川敷公園では野宿しているひとたちのテントがひどい暴力で壊されたり、自分たちの住むテントを守ろうとする人たちへ暴力が振るわれていました。その中には、24時間の監視体制や、話し合いを一方的に止める(約束の反故)、話し合いをしない(無視)などもありました。何度か堅川に通い、その酷さに愕然としました。暴力を振るっていたのは、区の職員、区に雇われたガードマン、公安

警察などでした。しかし、かれらも、暴力を振るときは、周囲に人が入り込めないように、通路を封鎖していました。暴力を見えないようにしてしまうのです。

今、目の前で人が殴られていたら、大抵の人は止めに入るでしょう。でもそれが、こちらからは見えないところでされていたら。気づかないのは当たり前、かもしれません。知らなかったんだから、何もできない、と言えそう。でも、よく見たら相手の様子がおかしかったり、最近、姿を見ていない、とか、気をつけていれば気になる点はいくつも出てくるはず。

今回、このハラスメントの問題にぶちあたり、自分が見ようとしていなかった、見たくないと思ってきたことが、暴力を温存・容認することにつながっていたのではないか、と思えてきました。見えないもの、しかも嫌なものを、人は敢えて見ようとはしない。知ろうともしない。「見えない暴力」は、そこにはびこり、人を苦しめます。野宿している人へのそれも、女と見なされる人へのそれも、見えなくされているから、余計しんどいのではないか(そしてそれは、いろいろな差別現象にもあてはまる。のだけど、より「見えない」ことが、より差別と暴力を生む)。だったらその暴力を、もっと目に見えるものに、あきらかにしていけばいいんじゃないだろうか。

この「見えない暴力」は、かなり構造的で、しかもあらゆるところにはびこっているのです、たぶん簡単には問題にされない。だからこそ、わたしは注意深くいなければなあと思っています。ぼーっとしてると、気づかずに人を苦しめる、自分がしんどい目に遭うまで気づかない、ということが起こってしまう。見えないものを見えるように、問題とされていないことを狙上に。自分がしたいことが、少しずつクリアになってきたような気が

します。でもまだまだ自分に見えてないことはいくらでも。これからも目を凝らして、注意深く、生きていきたいと思います。

野宿のフィールドで活動するって

西野 和

最近、別の団体なのですが野宿に関わる団体の活動中にセクハラ？が有りました。それでこれからどうしていくかとか、続けるならリスク管理やらなにやら考えたりするんですが、うー… っになってます。なにかしら活動するのも、なかなかうまくいかんもんやなあ。最近つくられた団体なので、その活動もまだ十数回、蓄積とかないし。

野宿というフィールドで活動する、この上においてやっぱりセクハラの問題は避けては通れないものなのかなあ。必ず当たる問題なのかなあ。男性ばっかりの社会なんて、どこでもそんなものだよ。とか 中年男性なんて、そんなものだよ。って言いますし、そうなんだろうなと思うんですが。なーんかなあ。ほんと なんてそんなことするかなあ。ばかやろう。まあ、ばかやろうと言ってるだけではだめなんだが。

活動に入る前に、そこがどんな場所なのか、特性を分かってやっていかないとと思う。どんな場所かわかるってすごく難しいが、出来るだけ伝えて新しい人には入ってもらわないと。そして、嫌なときは逃げていい、とか困ったときには味方になると伝えてかないと。今私はここの夜回りくらいにしか行っていないので、もっといろんなところいかないと、と思うところです。

それから、セクハラって、基本的に事後では遅いと思うんだよな。あとで相談聞いたり出来るけど、どうせ軽減しかできないし、引きずるし。対症療法であって根本治療とかできないし。ね。

などが最近考えていることでしょうか。

ここの夜回りは、安定してていいです。ほっとするね。それ以外の夜回り中感じたことなんかは『わいわい通信』にのせて頂いた文や、「活動外で会う人たち」(17p) という原稿に書いてあることとかぶるので、割愛させていただきます。

“燃料です”

野々村 耀

レイバーネットの 3 分ビデオで見たのだが、8 年間非正規雇用だった清水さんは Shop99 というコンビニに正社員として採用され、入社 3 か月で実質店長、9 か月後に正式店長になった。24 時間営業の Shop99 では各店舗に正社員は一人で、あとはすべてアルバイト。アルバイトでシフトが埋められないと、正社員が穴埋めをしなければならぬ。長いときは 37 日間休みなしで、また 4 日で 80 時間以上働いた（一日 20 時間！）。1 年 2 か月の過酷な労働のため病気で倒れ働けなくなった。未払いの残業代（出ていなかったのだ）と働けなくなった慰謝料を請求して訴え、2011 年 5 月に裁判では勝った。

その清水さんが、「燃料なんです」といった。労働者は人間でなく「燃料」だという意味だった。バブル崩壊、リーマンショック、競争力強化、欧州経済の危機、つぎつぎさまざまな理由で、人件費を削減する仕組みが作られ、働く人の権利が奪われ、過酷な労働が強いられてきた。そして高額所得者はますます豊かになった。

僕は清水さんの「燃料です」という言葉にショックを受けた。燃料は燃えてなくなれば、次の燃料を注入する。

何年か前に、派遣切りが問題になり、年越し派遣村が話題になった。政権交代のとき、労働者派遣法を抜本的に見直すといっていたが、結局のところ、うやむやになっている。大量に解雇したので、派遣労働者は当時より少なくなった。そして、有期雇用の労働者が増えているという。有期、つまり、1年とか半年という期限を切った契約だから、期限が来ると失業する。続けて働きたい人は、再契約しなければならない。その時に、労働条件が悪くなることが多い。失業が嫌なら、この条件を飲め、ということがまかりとおっている。非正規雇用はこのままではいけない、といい続けてきたが、清水さんは正社員なのだ。もはや、「正規雇用だから安心」ではなくなってきた。

このような働かせ方が、世界中に広がったので、イギリスでもアメリカでもヨーロッパでも抗議の声が上がっている。本当に燃え尽きる前に、われわれは燃料ではない、という声を上げたいと思う。

「当たり前」なこと

藤井（山本） かえ子

娘が1歳半になり、あちこち歩けるようになった。最近フタ付きのごみ箱を開けて中を触ろうとする。そんなとき、ついつい「ごみは汚いでしょ！触っちゃだめ！」なんぞ口走ってしまう。

ここでハタと考える。こうやってばかり注意をしていくことが、「ゴミ」から売れるものを集めたり食を得たりしている人々への偏見につながるのではないかと…。こう書くとかなりの飛躍があるかもしれないが、一旦「ゴミ」になったものを扱って生計を立てている人々のことや、その生活が不安定で差別を受けやすいことを伝えないでただ「ゴミは汚い」とだけ言い続けていると、子ども

もたちの中にその人々への蔑視の芽を育ててしまうのではないかと、思ったりする。さらに、大量にゴミを捨てている自分達の生活を省みて、その問題を一緒に考える必要がある。言うは易し行いは難し、ではあるが…。

娘を出産したことで、初めて自分自身の生活に肉薄する「他者」と暮らすようになり、葛藤も多い。だが、娘との生活を通じて、これまで気がつかなかった「当たり前のこと」に実は重要なこと、考えさせられることがあるといろいろ教えられている。果たして、これらを覚えているうちにちゃんと考えられるのだろうか…。時間がもっとあればなあ…。

光り輝く月と多縁社会

藤原 尚樹

私が初めて神戸の夜回り活動に参加した7月中旬、私は夜回りで誰にも会うことなくYWCAに帰ってきた。確かその日の担当コースはBコースだったが、訪れた場所に生活の痕跡はあるものの、人と会うことはなかった。YWCAに着いた瞬間、ほっとした。誰も野宿していなくてよかった。そんな気持ちが私の心の中を満たしていた。しかし、その後のミーティングで違うコースに行った人たちがその日会った人たちの様子を話しているのを聞いた。その時、私がその日たまたま会わなかっただけで、毎日場所を変えて、もしくは同じ場所で野宿生活を強いられていることには変わらないと痛切に感じた。

現在、私はAコースを中心に回っている。毎回誰かと話することができる。今では話を聞くことが私にとって1つの楽しみでもある。しかし、楽しい話だけではない。この前お会いした男性は、出身地が沖縄で若いころに上京したが、家族とは

連絡も取ることが出来ない状況だという。寒さが身にしみて感じる初冬、その男性は横になりながら「家族がいる沖縄に行きたい。鹿児島までは自転車で行けるけど、沖縄へ行くための船に乗る金がない」と寂しそうにつぶやいた。この話を聞いた時はさすがに辛かった。金銭的理由で肉親の誰とも会うことができない。そんな状況を私は経験したことがないどころか考えたこともなかった。その男性が寝ていた場所は私が最寄り駅を降りて、真っすぐYWCAへ向かう道中にある。今日はおられるだろうか、そう思いながら見るが、まだ一度もそこにあった自転車、そして本人を見たことはない。仕事でおられないのかなと思いつつ、その場を通り過ぎるが、あの時の言葉は今でも時折思い出す。

ところで、私はこの活動を通して17年前の記憶を思い起こしている。

1995年1月17日、阪神淡路大震災。当時、幼稚園に通っていた私は明け方にかけての強い揺れによって起こされた。私が住んでいた丹波市は県東部に位置し、震源地から離れているが、揺れに対する恐怖から布団にくるまり、両親に上から覆いかぶさられたまま恐怖に耐え忍んでいたことを覚えている。テレビからは阪神地域の被災状況が映像を通して延々と伝えられる。幼いながらも大変なことが起きていると感じた。しかし、幸いにして丹波市は被害がほとんど無かった。当時の震災について小学校や中学校で勉強はするものの、どこか遠くのこのように感じていた。

縁あって大学院で神戸に来て、改めてあの時の震災がもたらしたものを痛感する。それは私がこの活動を通してある男性に出会った時であった。その男性は震災で家と家族を失い、それ以来17年間、公園で生活しているという。深く尋ねること

はできない。むしろ、話しかける言葉が未だに見つからない。それは自分に対する羞恥心からきている。私は震災から神戸は復興したと思っていた。ここでいう復興とは、つまり区画整理事業などにみられる神戸の街並みのことだ。私は浅はかだった。本当の復興とは、そこに住んでいる人の心、生活状況の改善を指す。そんな当たり前のことも分からなかった。その男性に会って、震災の深刻さ、その奥の深さを知った。震災の真底を見ない限り、いつまでも「復興」は続いていくと思う。

夜回り活動に参加して、多くの人に出会った。知らない土地で知らない人に会えるのは嬉しい。今まで会ったことのない人と他愛もない会話を交わす。そんなことに意味があるのか、と思っていた。しかし、この夜回り活動に参加してその意味の大切さを知った。そしてトルコライスの意味を知った。

今の日本は個人化が進む。他者を受け入れようとはしない。無縁社会と言われるように、孤族の国と言われるように、京都市が生活費を稼ぐための空き缶を拾うことさえも禁止したように、神戸市が震災直後に、それ以前からの野宿者を「不適合者」とみなしたように。

そんな社会は光らない。私は夜回り活動で会える人たちと月をみる。月は綺麗だ。1人ではそんなこと考えなかった。1人で見る月よりも六甲山から見える神戸の夜景よりも出会った人たちと見る月は何倍も綺麗だ。他者と共生することで月は綺麗になる。社会は多縁なものとなる。明日のことを考えるのが、辛いものから楽しいものへと変わる。そう信じたい。

5. 付録—わいわい通信原稿

わいわい通信は神戸 YWCA 地域社会福祉部*が年に2回発行している、神戸 YWCA の地域活動のグループをつなぐ情報誌で、それぞれのグループの紹介などが書かれています。そこで夜回りのメンバーが書いた、「夜回り準備会(仮)の近況」として載せた文のうち最近3回のをここに付録として載せます。わいわい通信の本誌をご覧になりたい方は神戸 YWCA または私たちのグループまでご連絡ください。

* 神戸 YWCA 地域社会福祉部…それぞれのグループの連携を深め、神戸 YWCA の考える地域社会福祉を実現するために活動しているグループです。私たち以外に、そのグループには、高齢者のサポートとして、弓の木 歌の集い、わいわいランチ、わいわい亭、わいわいデイルーム、があり子どもと家族のサポートとして空飛ぶうさぎ(休会中)、ふしぎワールド、ちゃいやあらんどがあります。

1、2009年10月 臺 信一郎

最近仕事がまったくない。食べるものにも困る。襲撃にあった。とかとか。

野宿生活をしている人を取りまく現状。いつでも不当な苦しさを突きつけられている様な。

夜回り活動に参加するようになって一年ほどになります。一時期はかなり夜回りで会える人が少なくなっていました。7月10日の一斉夜回り(「神戸の冬を支える会」が主催する神戸市内の野宿生活者数の一斉調査)を受けてコースを広げ、新しく会える人も出てきました。野宿生活をする人の数が減っているというより、より見えにくい場所に追いやられているのかもしれませんが。実際、一斉夜回りでは去年からの人数の変化はそれほどありませんでした。50代、60代に集中する傾向が依然としてあります。



夜回りの体制としてもドライバー、リーダー不足などがあり、無理を言ってY関係の人に運転をお願いすることもありました。もともと活動を行う人数がそれほど多くないのですが、個々人にできることを考えて、負担が偏らないようにしなければと思います。最近MLの整備や、夜回りブログを始めたりもしています。

個人的なこれからの課題として、生活保護などの知識をつけたいです。一人一人の置かれている状況はその人と話を重ねて知っても、制度などのことは自分から調べていかないと分からないので（生来の怠け癖が仇に・・・）

最初のころと比べると、自分のなかで野宿をしている人への見方、考え方がかなり変化しているように思います。それは実際に話をしていくなかで、その人がどういう生活をしていて、何に困っているのか。そういうことを聞いていった結果だと思います。とはいえ、生活保護などの相談には今の自分の知識ではとても対応できず、他のメンバー頼みという感じです。肝心なところで力になれないというのはやはり悔しいものがあります。

人数は少ないながら、新規の参加者の人も増えてきています。今の活動を大切にしながら、みんなで野宿問題について、今後の活動について模索していけたらと思います。

2、2010年7月 井沼 佑太

神戸大学4回生の井沼佑太と申します。夜回りの活動紹介と、自分の感想を書かせていただきます。

夜回り準備会の活動は夜、隔週で野宿者のもとを訪問し世間話などを通して、何か異変があったり助けが必要とされたときに、できるだけそばで支えられる関係を作っていくものだとは僕は考えています。支えるといっても物的支援はほとんどできず、生活保護の相談に乗ったり、病院を紹介したりなどします。

僕は最初この活動概要を聞いて、また実際に行ってみて、正直なところ本当に地味な活動だなと感じていました。実際、自分はこの活動に参加して8カ月ですが、誰一人路上から生活保護の申請に成功して、アパート住まいができるようになった例を経験していません。この活動にどんな意味があるんだろうか？そもそも野宿者は路上から本当に抜け出したいと思っているんだろうか？そんな疑問に悩んだこともありました。

しかし最近になって活動の意義や、野宿者の方の置かれている現状が少しわかってきたように思います。



きっかけは、ビッグイシューの日本代表である佐野章二さんの講演を聞いたことでした。私が印象にのこった台詞は「人はホームレスになって、ホームレスになる」という言葉です。職を失い、家を失い、最後にだれも頼れる人のいない一人ぼっちになってしまったと感じたとき、自分に対する希望を失ってしまう、そして人はホームレスになる、という意味です。その言葉を聞いて僕は改めて、夜回りで訪れる野宿者の方々を思い出してみると、毎回夜回りで私たちがお邪魔することを楽しみにしている、少なくとも意識してくれている人がたくさんいることに気づきました。そして、仕事を紹介できなくても、物質的な支援ができなくても、野宿者の方に何も強

制せずに、ただ少しばかりの「つながり」を保とうとする夜回りの活動の重要さに気付きました。

仕事の紹介も、物質的な支援も、それを看板にしまつたら本当の意味で対等な関係が築けない。

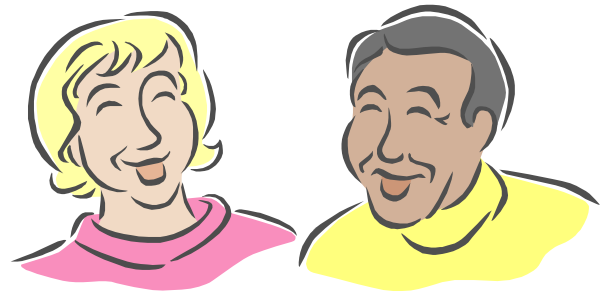
「与える」でも、「引き出す」でもなく、ただ存在を認めること、それが人が生きていくうえで一番基となる条件なのかなと感じています。そして「つながり」を少しでも良いものにして、苦しいときは自分には相談できる宛があるんだと野宿者の方に感じてもらえるよう、活動を頑張っていこうと思います。

3、2011年9月 西野 和

私はこの活動に初めて参加して、ゆるーく続けて1年くらいです。の中で思うのは、一番大切で、そして一番難しいことは、関係づくりだなあということです。

当然、相談することができる、信頼関係を作ることがまず重要です。でも、やっぱり人はやっぱり支えあって生きていくものなので、支援するほう、される方でなく、互いが楽しい、いい時間を過ごせるような関係づくり。これも大切だと思っています。ただ回って、元気か・困っていることはないか・何か変わったことはないかを確認して回るだけでは、

だめ。作業化してはお互いにも楽しくない。訪問先の方々と仲良くなって、楽しく話ができるような関係になりたいな。



それから、結構長く関係がある方に「人に迷惑はかけない、世話にはならない」と言われたことがあります。行くといつも楽しい話をして頂けるんですが、困ったときに助けを求めたりはしない、とのこと。それはその人の決めたこと、というか美学のような感じだったので私たちがどうこう言うことはできないですが、やっぱり悲しい気持ちになります。すごく難しいことですが、そういう風に考えている人にでも、頼っていいんだと思ってもらえるような、そんな関係が作れるようになれば最高だなあ。

初めて会うときは全く知らない、なんなのかわからない人同士だけど、何回も訪問していく中でしつかりとした関係を築けるようになりたいと思います。

神戸 YWCA 夜回り準備会 2010 年度会計報告

(自 : 2010 年 4 月 1 日 ~ 至 : 2011 年 3 月 31 日)

【収入】

【支出】

(単位 : 円)

項目	金額	備考	項目	金額	備考
寄附金	177,513	39 件	物品費	93,073	炊き出し食材費 (越年越冬)・下着・蚊取り線香・カイロ・医薬品・コーヒー等
助成金	228,000	NHK 歳末たすけあい義援金 200,000 円/兵庫県社会福祉協議会 (県民ボランティア活動助成) 28,000 円	車両費	42,700	燃料費・車両賃借費・駐車料等
			印刷製本費	122,062	活動報告書印刷費
			通信費	10,357	報告書発送費・振込手数料等
			支払寄附金	50,000	神戸・冬の家の越年越冬活動に協賛
			管理費	87,321	分室維持管理費、人件費等
合計	405,513		合計	405,513	

寄附・寄贈報告

(自 : 2011 年 2 月 1 日 ~ 至 : 2012 年 1 月 31 日、敬称略)

青山幸夫 東昌宏 飯濱玲子 井上みち子 伊藤しげ子 岩崎滋 岡田有生
 岡本祥浩 お遍路おばさん 影山雅子 柏木妙子 片山恵 小泉浩
 後藤安子 佐伯かおる 篠崎八恵子 鄭秀珠・下田隆清・由楽 内藤進夫
 中桐寿子 中田作成 長澤毅 西島明子 西山秀樹 二宮百合子
 野々村耀 FREE HELP 藤井 (山本) かえ子 牧野哲 三浦啓子 三島孝子
 宮田洋子 (北のコタン) 森崎武雄 守屋章子 吉田英三 米岡史之 渡辺順子

金銭面、物資の形で多くの御寄附、御寄贈をいただきました。ありがとうございました。

また、第 4 土曜の夜回り前に、美味しいお握りを握ってくれている山本容子さん、宮地京子さん、
 いつもありがとうございます。

万が一お名前の漏れや記載間違い等ございましたら、当会へご一報いただけると幸いです。

【編集後記】私は初めてここに来てから一年半位ですが編集作業に関わったのは今回が初めてです。何気なく報告書もらって読んでましたが、すごい時間かけて作ってるんだなと作る方に参加して実感。普段の活動中にはゆっくりと時間をとって感じたことを話す機会も文章化する機会もないので、報告書作成・編集会議はとてもいい機会になっていて、とてもよかったです。そして編集作業は、東京堅川・荒川での強制排除があったり、メンバーが国家試験やらで時間がなかったりでなかなか仕上げが終わらず…という感じでしたが、なんとか無事完成。みなさんのご意見・ご感想、疑問などぜひお寄せください (西野)

※今号の報告書は、「平成 23 年度 NHK 歳末助け合い義援金」の助成を受けてつくりました。

神戸YWCA 夜回り準備会 活動報告書 Vol.7

2012 年 3 月 1 日発行

編集 田宮遊子・臺信一郎・築山麻里子・鍋谷美子・西野和・野々村耀

発行 神戸YWCA 夜回り準備会（仮）

【神戸YWCA 本館】 〒651-0093 神戸市中央区二宮町1-12-10

TEL : 078-231-6201 FAX : 078-231-6692

【神戸YWCA 分室】 〒651-0062 神戸市中央区坂口通5-2-16 神戸YWCA 分室

TEL&FAX : 078-221-5111

【E-mail】 yomawari@kobe.ywca.or.jp 【URL】 <http://www.kobe.ywca.or.jp/NOJUKU/nojuku.html>

【郵便振替】 01100-0-10298 名義：神戸基督教女子青年会

【銀行口座】 三井住友銀行 三宮支店 (普)1015232 名義：(財) 神戸 Y W C A

※夜回り準備会へのご寄付は、郵便振替用紙にその旨明記するか、上記連絡先にご一報ください。

《参加者募集しています！》夜回りや病院訪問などに参加したいという方は、上の連絡先までご連絡ください。
--